
有限時間

葵月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有限時間

【著者名】

ZZマーク

25334

葵月

【あらすじ】

誰も知らない、不思議な店で売られているものとは。

無理だ。

社の命運がかかる、大事な商談の日。正樹は、朝は強いというのが子供の頃からの自慢だった。勤務し続けたこの20年、一度も寝坊なんかしなかった。ましてや、1時間も寝過ごしす事なんて。

腕に目をやる。チッ…チッ…チッ…カチッ。精確無比に時が刻まれていいく。9時まで、あと、5分。

「…どう考へても、30分はかかるよな。さうに渋滞ときたもんだ」そう呟くと、深くため息をつく。進んでは止まり、また少し進んでは止まる。全く、ついてない。もう諦めるしかないか…

不意に、コンビニエンス～何でもストア　という文字が目に飛び込んで来た。

「何だあれ、新手のコンビニか。…しつかし、センスないなあ」そういうながらも、ワインカーをあげ、引き寄せられるかのように駐車場へと入つていった。

「いらっしゃい

ドアを押し開けると、小柄なお婆さんがレジに座っていた。店内を見渡すと、少しばかり電灯は暗いが、至つて普通のコンビニのようになに見受けられる。多分、個人経営の店なのだろうと勝手に考え、缶コーヒーを一本取り、レジに持つていき、カウンターに置くと、

「あんたが欲しいのは？」

真っ直ぐこちらに視線を向けて、お婆さんが尋ねてきた。

「は…はい？何のことです？」

思わず聞き返す。

「 」は句読点でもストア。そんな物買いたいはこんでしょ」
言葉に詰まる。フラリと入つてしまつた事を少し後悔し始めていた。

「 売るよ」

お婆さんは無言で砂時計を取り出した。

「 砂時計、ですか。生憎なんですけど、時間がなくてそんなものを
見ている余裕がないんです」

「 だから売る、と」

お婆さんが紙を一枚取り出す。

“ 時間売買契約同意書”

唖然としながらも紙に目を通す。要約すると、何やら時間を取引で
きるようになるといつ。

どうせ大したものじゃないと思いながらも、

「 」に名前を書いてたら時間を買えるんですね？」

そう言つと、お婆さんはゆづくつ額を、砂時計をひっくり返し、力
ウンターに置いた。

店を出て車を走らせる。取り合えず遅れそつたとこは先方に伝
えたが、いくらなんでも30分は洒落にならないだろ。

減給は、免れないだろ。こんなことならいつそ、お婆さん
が言つたことが本当ならいいのに。

迫つくる針を背後に感じながら、できる限り車をどばす。

会社の地下に車を止め、エレベーターに駆け込み、3のボタンを押
す。ウイイインという音をたて昇るエレベーター。

一息つき、時計を見る。9時3分前…なんてことだ、こんな日に限
つて時計が止まるなんて…

ドアが開くと同時に、受付に向かう。

「 すみません、本日商談予定の川田正樹と申します。」

はい、どうぞ、と部屋に案内される。ネクタイを締め直しドアを開
けて、開口一番

「遅れてしまい誠に申し訳ありませんでした！」

深く頭を下げ、恐る恐る顔を上げると、社長がポカンとした顔でこちらを見ていた。

「君

「はい！」

「まだ9時まで3分ある、遅刻などしていいじゃないか。遅れる可能性があるとの連絡にしろ、どうにか遅れないように走ってくる様子にしろ、君の会社は信用が出来そうだな。どれ、話をきこうか」

正樹は状況が飲み込めない中、どうにか商談を終えた。

「それじゃあ、どうするかは後で連絡するから。わっとも、期待してていいよ」にこっと笑い社長は退室した。

ホッと胸を撫で下ろす。腕にある時計は、今はまた精確に針を刻みだしていた。

「まさか本当に時間が買えるとは思わなかつたよ……」

帰りに再び何でもストアを訪れた正樹はお婆さんに話しかける。

「で、いくら払えばいいんだい？」

尋ねるが、お婆さんは首を横に振る。

「時間はお金では買えんよ」

カウンターの砂時計は、ゆっくり、サーーンといつ音をたて、砂を吐き出し続いている。

「ならどうすれば？ 無料なのかい？」

「…疑問は時間が解決することもある。どれ、今日は店じまいじゃ。さあ出た出た」

渋々店を出て会社に戻った。

そのまま、いつの間にか数ヶ月が経過した。

時間があるのはなんて素晴らしいことか。ここに所、仕事は

上々で残業も無く、課長に昇進することもでき、家族と過ごせる時間もしつかりとれている。それもこれも、時間が買えるおかげだ。

あのお婆さんに、お礼をしにいかなきやな…などと考えて居ると、

「…むよー! 課長ー!」

はつと氣づく。しまつた、ボーッとしそぎたか。

「もう来期の予算申請締切を1時間も過ぎてますよ。地震があつたとはこえ、業務には差し支えなかつたでしょ? もう2時ですよ。

早く出してくださいね」

「地震…? 地震なんてあつたか?」

「らしくないです。寝てたんですか?」

と言しながら、にこやかに笑いかけてくる。

「あ、や、すまん。今出だから」

頭をかきながら取り掛かる。

カタカタカタ。

俺には時間が味方についてる。いろんなもの時計が5分進む間に終わるだひが。

「よし、でき…た?」

周りを見渡すと既に人影は無く、辺りは闇に包まれていた。

翌日。朝一番に向でもストアに向かつ。あの婆さんと一緒に一晩留つてもうといき立つてドアを開ける。

「こりゃしゃー」

「婆さん、昨日は時間が買えなかつた。どうこういじだい?」

「昨日、昨日…ああ、そつだらうねえ。」

「そつだらうねえ、じゃないだろ。大体ビーツして時間が」

一瞬、お婆さんの目が見開かれたかと思つと、バタン、とこつ音をたて、カバンが地面に落ちた。

カウンターに置かれた、砂時計の最後の一粒が、今ゆっくりと落
下を終えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5334/>

有限時間

2010年12月13日00時24分発行